第4回アジア・太平洋水サミット参加報告

2022年4月23日(土)・24日(日)の2日間、熊本市の熊本城ホールにおいて、アジア太平洋水フォーラム並びに熊本市の主催により「第4回アジア・太平洋水サミット」が開催されました。サミットは、開催国政府と、日本水フォーラムが事務局を務めるネットワーク組織「アジア・太平洋水フォーラム(APWF)」が共催する、国際的な水問題に関する首脳級会合で、アジア太平洋地域の持続可能な発展に向けた道筋や取り組みを、水の観点から示すことを目的とします。第1回目は2007年12月大分県別府市にて、第2回は2013年5月にタイ王国チェンマイにて、前回の第3回は2017年12月にミャンマー連邦共和国ヤンゴンにて開催しています。今回のサミットでは、「**持続可能な発展のための水～実践と継承～**」をテーマに、首脳級会合、分科会、サイドイベント、展示会などが行われ、アジア・太平洋地域の38か国から約3,000人以上が参加。開催地である熊本市は、地域住民、事業者と行政が協働して、市域を超えて地下水保全や流域治水に取り組んでおり、その成果は国際的にも高い評価を受けています。また、熊本市の上水道すべてが地下水で賄われているという特徴的な都市としても有名です。

写真提供:日本水フォーラム

サミット開会式では、天皇陛下からのお言葉、岸田内閣総理大臣、アントニオ・グテーレス国連事務総長、開催都市である大西熊本市長から挨拶されました。陛下からのお言葉や来賓の方々からの挨拶では、2016年の熊本地震や2020年の豪雨災害により亡くなられた方々に対して哀悼の意が示されました。また、世界的に新型コロナウイルス感染症の影響が続く中で水の魅力あふれる熊本でのサミットを開催できること、そして、国内外からの参加者に対しての歓迎の言葉などが述べられました。続いて、熊本市を中心に、九州地方8県の高校生世代の皆さんが参加するサミット開会宣言により、本サミットがスタートしました。

写真提供:日本水フォーラム

天皇陛下は「人の心と水－信仰の中の水に触れる－」と題した記念講演をなされ、人の心と水との関わりを、水に関する民俗信仰という視点から解説され、洪水や干ばつが世界で頻発している実態を踏まえ、人と水との関係をめぐる問題は、私たちが連帯して取り組まねばならない喫緊の課題であると述べられました。また、今回のサミットにおいて参加者すべてが、人と水との関わりを様々な角度から話し合い、水をめぐる課題とその解決に向けた具体的な方向性を見い出すことなど、水に関する国際社会共通の目標達成に向けた期待が述べられました。

写真提供:日本水フォーラム

開会式後に開催された首脳級会合で岸田総理から「熊本水イニシアティブ」が紹介されました。「熊本水イニシアティブ」は、アジア太平洋地域における水を巡る社会課題に対し、官民協働により、デジタル化やイノベーションを活用するなど、我が国の先進技術を活用した「質の高いインフラ」整備等を通じて積極的に貢献することを発表したものです。例えば、既存ダムの有効活用(操作ルールの変更によるダム運用改善)とダム再開発などを推し進めていくことで流域全体の水害リスクを減らしクリーンエネルギー創出等を行い、社会的課題の解決・持続的な経済成長を目指していくなど、今後5年間で約5千億円の支援を行うことが表明されました。

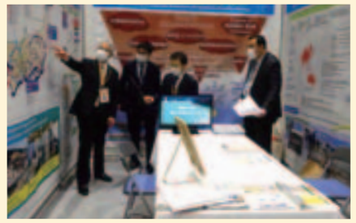
2日間のサミットを通じて、「熊本宣言」が発出され、強靭性、持続可能性と包摂性を兼ね備えた「質の高い社会」への変革が必要であり、その実現のためには、ガバナンスを整え、資金ギャップを埋め、水分野でのハード・ソフトを総合した、質の高いインフラ整備を強化する必要があることが強調されています。サミットの成果は、2023年3月に開催される「水の国際行動の10年」の国連中間レビュー会議をはじめ、水に関係するグローバルな議論プロセスにて報告され、反映し活用されていくことが期待されています。

水資源機構は、展示会場において、国土交通省と合同でダム再生事業と水資源機構事業に関する展示ブースを設置し、海外展開が期待されている日本のダム再生の取り組みについて紹介するとともに、機構の国内外での事業や活動を水資源機構60年の功績と併せて紹介しました。

ブースには2日間にわたり国内外から多くの訪問者があり、機構の事業の特徴や成果などを説明。特に、ウズベキスタン共和国のナザロフ・アジムジョン水資源副大臣が展示ブースに来所された際には、金尾理事長と水問題についての熱心な対談を通じて副大臣は、機構の事業について強い関心を抱かれた様子でした。

展示ブースでは、九州を中心として活動する官公庁やNGOなど25団体が展示ブースを設けて出展し、それぞれの活動内容を報告・紹介されていました。特に2021年に設立された九州の高校生を主体とするユース・水フォーラムのメンバーによる発表が各所で行われており、会場は若い世代のエネルギーと活気に満ち溢れ、サミットのテーマでもある「実践と承継」を会場で実感するものとなりました。

水資源機構としましても、サミットの成果を踏まえ、気候変動といった事象に対し「質の高いインフラ」等を通じて国内外の水問題の解決に貢献してまいります。


水資源機構展示ブースの様子(右はウズベキスタン共和国ナザロフ副大臣来所)

詳しくは、第4回アジア・太平洋水サミットのホームページでご確認ください。